



連載…



No. 5

モンテッソーリ教育ってなあに?

2011年9月




敏感期について


幼児期の子どもには、一生に一度きりの特別な感受性を発揮する「敏感期」という時期があります。

この「敏感期」に入ると、子どもは環境から必要なものを吸収し、自分を創っていきます。

敏感期は以下のように分けられます。

言葉に対する敏感期→生後4カ月  ○○○○

赤ちゃんは驚くべき早さで普通の生活の中で言葉の獲得を成し遂げてしまいます。


感覚に対する敏感期→3歳～6歳  ○○○○

人は「見る、聴く、触れる、嗅ぐ、味わう」の際に、「目（視覚）、耳（聴覚）、皮膚（触覚）、鼻（嗅覚）、舌（味覚）」という感覚器官を使います。これらは人間が外の世界と関係をもつのに大切な窓口で、この窓口が完成し洗練されるのが、「感覚の敏感期」と言われる時期です。

※「感覚の敏感期」は一生に一回きりの感覚を磨いていく時期です。

優れた感性をもった人に成長するためには、まず外界から感じ取る感覚をこの敏感期に磨いておかなければなりません。

そのために、子どもが感動したり、喜んだりすることが大事です。

秩序に対する敏感期→2歳～4歳  ○○○○


2歳前後になったころから当然泣き出したり、急に不機嫌になってぐずったりして周囲を困らせることがあります。

その様子には2つの理由があります。

- ・「自分で」やりたかったのに、大人が勝手にやってしまったから
- ・「いつもの順序でない」「いつもの場所がない」と秩序が狂ったから



※子どもの不機嫌になる理由を知らなければ、親は困惑するばかりですが、それが「秩序感」という時期特有の感受性に起因しているのだと知れば、子どもの反応をもっとよく見て、ふさわしい対応の仕方考えることができます。

運動の敏感期→2歳～7歳  ○○○○

随意筋を自分の思いどおりに自由自在に使いこなせるよう調整するために、ありとあらゆる動きを全力投球でする時期です。子どもたちは、ある動きを身につけるために繰り返しやるのが楽しくてたまらず、そのために果てしない情熱がでてきます。

【ありとあらゆる動きの種類】

- ① 体全体を大きく動かす
- ② バランスをとる、つまり平衡感覚や均衡感覚
- ③ 肩と腕を一緒に使う（スコップで土を掘る、金槌で打ちつける など）
- ④ 指先を使う（折る、切る、貼る、縫う など）

例) 道路の白線の上をヨタヨタ歩いたり、ちょっと高くなったブロックの上を危なっかしげに歩いていると、反射的に「危ない!ダメよ!」とストップさせてしまいます。でも、この時期は、こんな曲芸をしながらバランス感覚を身につけているので、反射的にやめさせるのは、できるだけ控えましょう。危険でないかどうか注意を払いながら、大人が意識して見ていると、子どもも意識して慎重に行うので事故に連なるような失敗はしないものです。

例) 子どもは重いものを持つのが大好きです。それは均衡感覚といって、重いものと自分の体力との均衡関係を保ち合おうとしているのです。子どもが重い物を「ヨイショ!ヨイショ!」と持っていようものなら、「あっ落とす!」と取り上げたり、「ダメでしょ!」と阻止したり、代わりに持ってやったりせずに、できるだけ納得いくまでさせてあげましょう。